

樋口一葉後期の小説

「たけくらべ」以後

片岡 懋

明治二八年一月三〇日発行の「文学界」第二十五号に「たけくらべ」が掲載されはじめます。が、第二十七号（明28・3）の（八）までは大音寺前の風物なり、其処に住む人々の生活なりを書いた後に、長吉、信如、美登利、正太郎、三五郎などを登場させ、それぞれの境遇について述べ、千束神社の祭の当日、美登利ら表町組の子供達が筆屋の店頭に集まっている処に、長吉に率いられた横町組の仕掛けた喧嘩の模様とその結果に加えて、正太、美登利、信如の關係などを書き添えて終っています。「たけくらべ」の序ともいうような部分の為でもあるからでしょうが、作者の筆は、吉原界隈の大人達の縄張り争いが子供の世界にも影を落とし、それが祭りの日の衝突を引きおこしたことや、その衝突の中で苛められる三五郎が下積みの境遇故に子供ながらに苦悩する様が描かれてはいますが、全体としてはその衝突の模様なり、登場人物の表面的な生活状態なりそれぞれの關係なりが、説明的に述べられてはいるだけです。

それが八月三〇日発行の「文学界」第三十二号掲載の（九）、（十）

になりますと、大分に異なつて来ます。（九）にしても、信如の父である龍華寺の和尚とその家族の僧侶的でない生活を具体的に描くことが主になってはいるのですが、和尚が「片肌ぬぎに団扇づかひしながら大盃に泡盛をなみく」と注がせて、さかなは好物の蒲焼を表町のむさし屋へあらい処をとの誂へ、承りてゆく使ひ番は信如の役なるに、その嫌やなること骨にしみて、「我身限つて腥きものは食べまじと思」ったとか、「父が仕業も母の処作も姉の教育も、悉皆あやまりのやうに思」う信如が、両親にやめてくれと言つても聴いて貰えず、「我が言ふ事の用ひられねば兎角に物の面白からず」、「言ふて聞かれぬ物ぞと諦めればうら悲しきやうに情なく」なり、結局引込思案の消極的な子供になつてしまつたことを、説明的な文章ではありますが、書くことによつて、子供の性格形成の上に環境なり親の生活態度や言動なりがどれ程大きな影響を及ぼすものであるかを、はっきりと指摘しています。（十）でも家の生活状態なり父の生活態度なりの故に、自己の感情の率直な表現を抑えて、種

種氣を配らなければならぬ三五郎であることを書いた一葉は、(十一)では表町組の女王の位置にある故に、信如に心惹かれながら、信如が横町組の大將に押されていることもあって、その心を素直に生きたことが出来ず、殊更に正太郎の前で信如の悪口を云う美登利を描き、縄張りが組の中心人物をも梗塞する様を示しています。(十二)、(十三)になりますと正太郎の前では信如の悪口をほん／＼言う美登利も、独りで信如に対する時には、常には悪態をついていることが作用していることは言う迄もありませんが、必要な事さえ言うことが出来ないで物蔭でもじ／＼している、普通の少女でしかないことを示すとともに、信如も美登利に心惹かれていることを書いています。しかし美登利が信如の足許近くに投げた「紅入り友仙の雨にぬれて紅葉の形のうるはしきが我が足ちかく散ほひたる」を「そぞろに床しき思ひはあれども、手に取あぐる事をもせず」、結局「捨て過ぐるにしのびがたく、心残りして振かへ」るだけでその場を立去ってしまう信如であることを描いて、それ／＼が自分の思いを相手にそれと告げ得ない存在であることを示しています。美登利の信如への思いを示した「紅入り友仙」に対して、信如の美登利への恋はこの作の最後の「信如が何がしの学林に袖の色かへぬべき当日」の朝、「誰の処業と知る者」はありませんが、「水仙の造り花を格子門の際よりさし入れ置きし者の有」ったことに示されていることは言う迄もありません。その水仙を「美登利は何故となくなつかしき思ひにて違ひ棚の一輪ざしにいて淋しく清き姿と愛で」ていることを書いて、彼等の淡い恋心の一応の結末とした一葉でしたが、彼等の「思ひのとゞまる紅入の友仙は、いぢらしき姿を空しく格子門

の外にとゞめぬ」と書くことによって、美登利の赤き誠の心は空しく泥にまみれてしまうことを示し、やがては多くの人にその心を蹂躪られてしまう美登利であることさえも暗示しています。

(十四) 以下になりますと、少女の世界から一人前の女性の世界に一足踏み込んだ美登利が描かれているのですが、大黒屋の看板である姉大巻の部屋で島田鬻に結われた美登利を見たことから、団子屋の背高が「己れは来年から際物屋になつてお金をこしらへるのだから、夫れを持つて買ひに行くのだ」と、正太郎の「大巻さんより猶美しいや、だが彼の子も華魁になるのでは可愛さうだ」と言うのに答えていることを書いて、前段に呼応させると共に、「私は嫌やでならないと顔に袖屏風、往來を恥ぢ」、「島田の鬻のなつかしさにか振かへり見る人たちをば我れをば蔑む目つきと取」り、足早に自家へ入ってしまった美登利は、一緒に来た正太郎をも追い返し、それ以後は「用ある折は廓内の姉のもとまで通へど懸けても町に遊ぶ事」のなくなったことを書き添えて、かつては「我れ寮住居に人の留守居はしたりとも、姉は大黒やの大巻、長吉風情に負けを取るべき身にもあらず、龍華寺の坊様にいぢめられんは心外」と考えていた人が、島田鬻に結った自己の姿を人目にさらすことを避けるように変り、「何時までも何時までも人形と紙雛様とを相手にして飯事ばかりして居たらば嘸かし嬉しき事ならんを、ゑゝ嫌や／＼、大人に成るは嫌やな事、何故此やりに年をば重る、もう七月十月、一年も以前へ戻りたいにと老人じみた考へを」するようになったことを示しています。遊女の位置がどういふものであるかを感じとり、やがては自分も遊女にならなければならぬことを思つて、思い屈し、

苛ら立つ気分には陥っている美登利であることが描かれています。

しかし彼女の母親は娘の憂鬱の原因をそれ程深刻には考えておりません。作者は美登利の変化について「人は怪しがりて病ひの故かと危ふむもあれども、母の親一人は笑みて今にお俠の本性は現れまする、これは中休みと子細ありげに言」っていると言っています。これは「夫れなら何うしてと問はるれば憂き事さまゞ是れは何うでも話しのほかのつゝまじさなれば、誰れに打明け言ふ筋ならず、物言はずして自づと頬の赤うなり、何故と言はれねども次第く心にほそき思ひ、すべて昨日の美登利が身に覚えなかりし思ひをまうけて、唯々ものゝ恥かしさ言ふばかりなく」と書かれた、「すべて昨日の美登利が身に覚えなかりし思ひ」を引き出す原因となり、彼女をして「多々嫌やゞ、大人になるは嫌やな事」と考えさせた現象にのみ対応するものでしょう。ですから、美登利にこのように衝撃を与えることになった原因の現象が去り、或はそれに慣れた時、彼女の本性は再び現われるというのです。母親は、その事を契機として起った、娘の内面の変化には全く気付いておりません。此処にも子供の心を理解することの出来ない親の存在すること、そうした周囲の無理解が子供を「柔順し」く、消極的にすることが書かれています。

尤も竜華寺の和尚の場合には、「もとは檀家の一人なりしが早くに良人を失なひて寄る辺なき身の暫時こゝにお針やとひ同様」になつた女性がよく働いた処から、「和尚さま経済より割出しての御不憫かゝり」「人目を恥ぢぬやうに成」り、花、信如の姉弟も「此人の腹より生れて」います。又姉娘は「美人といふにはあらねど年頃

といひ人の評判もよく、素人にして捨て置くは惜しい物の中に加へ」られていることを利用して、「田町の通りに葉茶やの店を奇麗にしつらへ、帳場格子のうち此娘を据へて愛敬を売ら」せ、和尚自ら「貸金の取たて、店への見廻り」を法用のあれこれや説教の合間に行い、忙しい日々を送る為にはということ、夕暮の椽先に片肌ぬいで、蒲焼を着に泡盛を飲み、酉の市では門前の空地に簪の店を出して御新造に売らせ、「夜に入りては自身をり立て呼た」てているというのですから、僧侶の生活に閉籠っているのではなく、愛慾の点でも金儲けの点でも自己の望むがままに、世間の普通の人々と変らぬ生活をしていることとなります。こうした父の生活や母と姉の在り方に嫌悪感を持ち、否定的になっていた為、自らの美登利に対する気持を圧えてしまった信如ですから、子供には僧侶の在るべき相を嚴格に説きながら、自らはそれに矛盾する言動を平気でやっている父に対する不信感が、信如をより僧侶的な在り方に執着させ、陰気で変屈と云われるような子供にしてしまったとも言えますが。

なお美登利の場合にしても、彼女がやがては華魁にならなければならぬ自己の将来を感じたが故に、朗かに思いのままに行動し得なくなっている処に、自分の将来に羞恥を感じている娘の心の反映があつたことを全く理解しようとしなない母や父であることを知ると同時に、既に定められているその将来を生きる外ないと諦めたが故の、憂鬱であり無気力であった筈ですから、やはり父母に対する不信が原因であつたとも考えられるのですが、一葉はいずれの場合にもそこ迄は考えていないようです。が、現象としてはそれ故の絶望

感なり諦めなりから、僧侶や華魁の世界に入る決心をした信如であり、美登利であったことを捉えて書いていると云えましよう。

以上のように見て来ますと、「たけくらべ」は子供たちが親に定められた将来を生きなければならず、しかも江戸時代以来の義理人情の支配し、公娼制度の存在する特殊な地域に生きるが故に、それらを批判し得るような境遇ではなかった為に、自分らの定めた子供の将来について考える親はなく、従って子供達の心に起った変化を適切に捉えることも出来なかったことから、自分の心を率直に示すことを諦め、消極的な気持になってしまったことを書いて、子供達の自我の目覚めと目覚めた自我を朗らかに生きようとする気持を梗塞する種々な原因に触れると共に、そうした中に生きるが故に絶望的になった子供達の相の一端を掬い上げた作品になっているのですが、作者はそれらを十分に描くかわりに、詩的な美しい風物によって情趣的な世界に流してしまっていることは周知の事でしょう。

しかし一葉は「たけくらべ」連載中に「にぎりえ」を発表し（明28・9「文芸倶楽部」）、女性達の上に重く覆いかぶさっている男性一般の姿と良人の存在とを提示していますし、銘酒屋菊の井の酌婦お力の苦悩を描いて心理小説への傾斜をはっきりと示しています。

お力は菊の井の看板女ですが、自らは「お力が無理にも商売して居られるは此力と思召さぬか」と言って、大湯呑で酒を呑み、「あゝ嫌だ嫌だ、何うしたなら人の声も聞えない物の音もしない、静かな、静かな、自分の心も何もぼうつとして物思ひのない処へ行かれるであらう、つまらぬ、くだらぬ、面白くない、情ない悲しい心細い中に、何時まで私は止められて居るのかしら」と思うと、酒席にいる

ことも嫌になつて部屋を飛び出し、客を放つたまま家を出て、当もなく急ぎ足で歩くような女です。「これでも折ふしは世間さま並の事を思ふて」、「寧九尺二間でも極まつた良人といふに添うて身を固めようと考へる事もござんすけれど、夫れが私は出来ませぬ」と、客の結城朝之助に話してもいます。銘酒屋の酌婦ですから、来るほどの人に出鱈目のお世辞を言つて喜ばせてはいますが、彼女が特に選んだ客は、「町内で少しは幅もあつた蒲団屋の源七」と、「自ら道楽ものとは名のれども実体なる処折々見えて身は無職業妻子なし」と言い、風裁も一見して尋常ならず堂々としており、「落つて物をいふ重やかなる口振り、目つきの凄くて人を射るやうなるも威厳の備はれる」ように思はれた結城朝之助とです。彼女がその身の上を話し、将来の在り方について相談し、何らかの前途を与えて貰えそうで、必しも世の常識には囚えられていないような人が選ばれています。幾回かの顔合せを重ねた後に、お力が朝之助に自己の身の上を話しているので、それは明かでしょう。

お力の「祖父は四角な字をば読んだ人」ですが、「世に益のない反古紙をこしらへしに、版をばお上から止められ」、「ゆるさねぬとかにて断食して死んださう」です。「父といふは三つの歳に椽から落ちて片足あやしき風になりたれば人中に立まじるも嫌やとて居職に飾の金物をこしらへましたれど、気位たかくて人愛のなければ鼻負にしてくれる人もなく」、「細工は誠に名人と言ふても宜い人」でしたが、親子三人貧窮の中に過し、妻が肺結核で亡くなって後一年経たぬ中に若くして死に、お力はそれ以後孤児となつていたようです。彼女自らについては「三代伝はつての出来そこね」、「氣違ひ

は親ゆづりで折ふし起る」と説明しています。祖父の代から世間的な常識に囚われることなく、自己の好みの世界を感情の趨くままに生き、世に容れられず自己の生きる場を見出し得ないままに世を去っています。彼女も「親ゆづり」の傾向の所有者として、世俗に囚われないで自己の感情を生き得る世界を求め、それを容易に求め得ないが故に苛ら立っていたのです。そんな彼女が自己の生きるべき方向、世界についての示唆を与え、或は導いてくれることを期待して選り、親しんだのが源七であり、朝之助だったのです。

処が源七はお力が親しみと見せると屢々彼女の許を訪れ、財産を失い、自らは土方の手伝いをするようになり、妻の内職の賃金を加えて辛うじて日々の生活を営むようになっていたのですが、「折ふし何の彼のといつて」はお力を訪ねて来ますし、「去年の盆には揃ひの浴衣をこしらへて二人一処に蔵前へ参詣したる事などを思ふともなく胸へうか」べては、仕事に出る気もなくして妻のお初に酒を買って来いと難題を云いかけ、結局お初を離縁しています。

蟬表の内職に精を出しているお初は、外仕事から疲れて帰って来る源七を出来るだけ慰めようと、湯を沸かし、彼の好物を用意するなど気を遣い、「気を取直して稼業に精を出して少しの元手も持つるやうに心がけて下され、(中略)男らしく思ひ切る時あきらめてお金さへ出来ようならお力はおろか小紫でも揚巻でも別荘こしらへて囲つたら宜うございましょう」と良人を励まし、出来る限り家庭内を明るくしようと骨を折っているのですが、たま／＼良人の酒を買って来いとという言葉に、「御酒を呑で気を晴らすは一時、真から改心して下さらねば心元なく思はれます」と嘆き、「浅ましい口惜

しい愁らい人と思」い、「恨みの露を目の中に」湛えている時に、子供の太吉がお力に買って貰ったと云って菓子を持って来たのを、子を使って夫の気をひくお力的手段と考えて腹を立て、その菓子を外へ投げ棄てたことから源七の怒りを買ひ、詫びても許されず離縁され、帰る処も無い身で子供の手を引きながら家を出て行きます。

このようにお力を思い、妻を離縁する源七はお力が求めている男とは全く異なっていますので、「何も今さら突出すといふ訳ではないけれど逢つては色々面倒な事もあり、寄らず障らず帰した方が好い」と言うことになるのですが、妻子を気の毒に思い、自分の本心がわからぬ人々から鬼と言われることを苦痛と思うが故に、太吉に菓子を買い与えているのです。それもお初や源七に誤解されてしまっているのです。お力にとって源七が頼りにならない男であることは明らかでしょうが、お力の本心を誤解した源七はお力を殺してしまえます。愛慾の本能に衝き動かされるだけの男が、女性にとってどういふ存在に過ぎないかはつきりと示した一葉であったと云えます。又お初に対する源七の姿勢やお力の朋輩のお高のことを考えた時、世間一般の結婚生活が女性にとっては決して好ましいものではないことになりました。お力が結婚を望まない理由も示されているわけです。

結城朝之助にしても頻りにお力の身の上を知りたがったり、彼女の彼に好意を寄せているのを知ると、「夢に見てくれるほど実があれば奥様にしてくれる位いひそうな物だに根つからお声が／＼りも無いは何ういふ物だ、古風に出るが袖ふり合ふもさ、こんな商売を嫌だと思ふなら遠慮なく打明けばなしを為るが宜い、僕は又お前のや

うな気では寧ろ楽だとかいふ考へで浮いて渡る事かと思つたに」と言っていますから、世間普通の男とそれ程變つた存在とは考えられていません。その為にお力の身の上を聞いた後にも、「お前は出世を望むな」、「思ひ切つてやれ」と、世間並のことを言うに過ぎない人として一葉は描いているのです。それは一葉の周辺に在った男性たちの中に本当に女の自主独立について考え、彼女に示唆を与えてくれる人がいなかった為でもあつたのですが、一葉自身にもはつきりしない問題だつたのでしょう。お力の描き方にもそれを指摘することが出来ます。

「お前は出世を望むな」と突然に朝之助に言われて、「えツと驚き様子に見えしが、私等が身にて望んだ処が味噌こしが落、何の玉の輿までは思ひがけませぬと」答え、更に朝之助が「思ひ切つてやれ」と言いますと、「あれ其やうなけしかけ詞はよして下され、何うで此様な身でござんするにと打しほれて又もの言はず」というお力が描かれています。しかし前に触れたように彼女は誰とも結婚する気はありません。朝之助に対しても「そも／＼の最初から私は貴君が好きで好きで、一日お目にかゝらねば恋しいほどなれど、奥様と言ふて下されたら何うでござんしよか、持たれるは嫌なり他処ながら慕はし、一ト口に言はれたら浮気者でござんせう」と言はせていますし、「三代伝はつての出来そこね」であるお力ですから、単なる玉の輿を望んでいる筈はありません。そういうお力を理解し得ない朝之助であることがわかつて「打しほれて又もの言はず」であつたのかとも思いますが、ではどうしたらよいのか、どうしたいのかを具体的に説明するお力は書かれておりません。却つて

朝之助に凶星を指されて驚くようなお力と書いてしまっています。結局一葉自身お力をどのような世界にどのように活動させたならば、「親ゆづり」の「氣違ひ」の、世俗的な常識の支配する世界にあって、それに囚われずに生きる相を示し得るのかはつきりしていなかつたのです。この点は「十三夜」(明28・12)「文芸倶楽部第十二編臨時増刊閨秀小説」や「わかれ道」(明29・1・4)「国民之友」第二七七号新年附録)でも變つておりません。

「十三夜」は互に心ひそかに恋し合つていながらそれを明かにしなかつた為に、思いも寄らぬ結婚生活を送るようになった男女が、それ／＼に不調和を味わわなければならなかつたことを描いていますので、「たけくらべ」の少年少女を普通の境遇に置き換えた上で、結婚し得なかつた彼等の後日譚を描いたというような一面も持っています。区役所に勤める腰弁の娘阿関は近所の烟草屋の息子高坂録之助を恋し、独り秘かに彼の店に座つて商いをしている自分の姿を想像したりしていましたが、一七歳の正月に通りがかつた原田の車の中へ落ちた羽根を貰いに行つて顔を合せたことから、原田からは非にと請われて彼の許に嫁入ります。結婚後半年程は下へも置かぬような取扱いでしたが、子供が生れてからは全く變つてしまします。良人は召使の前でも彼女の不器用、不作法の数々を並べ立て、二言目には教育の無いことを軽蔑し、五日六日と家をあけることも平常のこととなります。それを七年の間我慢していた阿関でしたが、とう／＼我慢し切れなくなり、十三夜の夜寝入つた子供を置いて実家へ帰つて来ます。父に頼んで離縁して貰おうと決心したからです。しかし阿関の話聞き終つた父は一応は娘に同情しながらも、

身分の違う良人（月給百円の奏任官）だから考え方に相違があるのは当然、その難しい良人の機嫌を整えるのが妻の役であること、子供もあることを述べ、「一端の怒りに百年の運を取はづして、人には笑はれものとなり」「泣くとも笑ふとも再度原田太郎が母と」呼ばれることはなくなってしまう、弟亥之助が現在の勤めも原田の世話、「愁らからうとも一つは親の為弟の為、太郎といふ子もあるものを今日までの辛棒がなるほどならば、是れから後とて出来ぬ事はあるまじ」「同じ不運に泣くほどならば原田の妻で大泣きに泣け」と言つて、娘の願いは聴いてくれません。結局阿関は「ほんに私さへ死んだ気になれば三方四方波風たぐず」「今宵限り関はなくなつて魂一つが彼の子の身を守ると思ひますれば良人のつらく当る位は百年も辛棒出さうな事、よく御言葉も合点が行きました」と言つて、原田の家へ歸つて行きます。

一応は阿関に同情しながらも家の為、弟の為、子の為を強調し、娘の翻意を促す父の相が描かれています。阿関の心は全く無視されているのですが、一葉はその父の言葉に全く反論することなく、諦めて原田の許に帰る阿関を書いています。一葉には父に反論して自己を主張する阿関が書けなかつたのです。父に離縁をと頼む阿関は私はこれから内職なり何なりして亥之助が片腕にもなられるやう心がけますほどに、一生一人で置いて下さりませ

と付け加えているだけです。「私が此様な意久地なしで太郎の可愛さに気が引かれ、何うでも御詞に異背せず唯々と御小言を聞いて居りますれば、張も意気地もない愚うたらぬの奴、それからして気に入らぬ」と原田に言われると自ら言う阿関を書いた一葉は、家庭内に

あつても主婦としての在り方を自主的に創り出そうとはしない女性としたこともあつて、自分として為たいことは何一つ持つておらず、従つて父に対しても主張するだけの自己を持たぬ人として描いてもいるのですが、彼女を主張する自己を持つ女性として書くことも出来なかつたのですし、男の自分勝手さを批判する女性としても書き得なかつたのです。「よしや良人が芸者狂ひなさらうとも、困い者して御置きなさらうとも其様な事に愠気する私でもなく」と阿関に言わせた作者は、阿関を旧い型にはまつた、おとなしい女として描いているだけです。だから実家からの帰途に乗つた車を引いていた録之助の話にみられる、彼の自分勝手さを批判することも出来ない阿関を書いてしまうことになります。

録之助は阿関の「嫁入りの噂聞え初めた頃から、やけ遊びの底ぬけ騒ぎ」をするようになり、母親は彼を家に引き留める為に世間で美しいと評判の娘を嫁に迎えました。それは母が「無茶苦茶に進めたたる五月蠅さ」に、録之助が「何うなりと成れ、成れ、勝手に成れとて」迎えたもので、彼はどんな女であっても「私の放蕩は直らぬ事に極めて」おり、「遊んで遊んで遊び抜いて、呑んで呑んで呑み尽して、家も稼業もそつち除けに」し、母親は姉の嫁入り先に引取つて貰い、妻子は実家へ歸して音信不通、自らは木賃宿住いで車夫となつています。妻子に対しては原田の阿関に対する以上に酷い取扱ひ方をしている録之助ですが、阿関はそういう録之助のやり方に対して全く批判しておりません。源七の理不尽さをはっきりと批判し、非難するお初やお力を書くことの出来なかつた一葉は、此処でもそれが出来ず、そうした結果を招くことになつた自分たち

の在り方を反省する阿闍なり録之助なりを書くことも出来なかったのです。十三夜の月影に照らされながら上野の山内を語り歩いた二人の広小路での別れの様を書いた後を

其人は東へ、此人は南へ、大路の柳月のかげに靡いて力なささうの塗り下駄のおと、村田の二階も原田の奥も憂きはお互ひの世におもふ事多し。

と結んでいるだけです。「たけくらべ」の美登利、信如の場合には彼等がより稚なかつたこともあって、自分の氣持を相手に伝え得なかつたことを反省するかわりに、「紅入り反仙」や「水仙の造り花」にそれ／＼の心を托させてしまったのも仕方のない一葉だったようですが、「わかれ道」のお京にも自己の生きる道が見出し得ないが故に苛ら立つ女性しか示し得なかつた一葉でした。

お京は春に傘屋の持ち家の長屋へ越して来て、洗い張りや仕立物で自分の生計を支えていましたが、その年の暮には妾になる決心をした女性です。この家へ来る迄の生活については全く書かれてはおりませんが、傘屋の油引きの吉三には「お前さんなどは以前が立派な人だと言ふから今に上等の運が馬車に乗つて迎ひに来」と言われていますし、「少し長めな八丈の前だれ、お召の台なしな半天を着て」夜鍋仕事をしていますので、以前は着物などは一通りのものを持つ程度の暮しをしていたものと思われまます。尤も「八百屋横町に按摩をして居る伯父さん」がいるようですから、どの程度の暮しをしていた人の娘だったのでしょうか。「大つごもり」(明27・12「文学界」)のお峰の後のような氣もしますし、「暗夜」(明27・7、8、11「文学界」)のお蘭の後身を世話にくだき、現実的にしたような

氣もします。但しお峰とお蘭では生活環境は全く異っており、前者では「以前は立派な人」とは言えませんが、これを吉三自身と比した上での言葉とすればそれ程の問題はないかもしれませぬ。又、お蘭の後とすれば最後の妾に行くことにも何らかの意味があることになり、一年間の仕立屋稼業もその期の来るのを待っていたことになつたのです。それは兎に角、書かれている範囲では兄弟姉妹はなく、両親と死別の後に自主独立の生活を目指して仕立屋をしていると考えてよさそうです。しかし「此様な容体で人さまの仕事をして居る境界」と自ら言っていますから、豊かな日常を送り得る状態でないことは明かでしょう。そんな彼女に妾の話を持ち込んで来る人も少なくなつたのでしょう。「左様さ馬車の代りに火の車でも来るであらう、随分胸の燃える事があるからね」と言っていますから。或は金を借りに行った先で、一葉に対した久佐賀義孝のように妾になることを条件に金を出そうとした人があつたのかもしれませんが。そんな中で兎も角も一年間頑張つて針仕事をしていたのです。しかし思い通りにならない生活に苛ら立ち、精根の泉を枯らしもしてしまつたのでしょう。「洗い張に倦きが来て、最うお妾でも何でも宜い、何うで此様な話らないづくめだから、寧ろその腐れ縮緬着物で世を過ぐさうと思」い、何処かのお邸へ妾に行くことに決めてしまつたのです。が、この作でもお京が将来に何を期待し、何を實現しようとして悪戦苦闘しているのかについては全く書かれておりませぬ。はつきりした目的もないままに唯単純によい暮しに入ることを求めて努力してただけかもしれませぬ。その為の僅かの間の困難な生活に嫌氣がさしてしまつたのかもしれない。お力に於ける源七や朝

之助のように、周囲の人々も彼女の自主的な生活維持に手を貸すことはなかったでしょう。それどころか若い美しい女性が独りで生活していれば妾にして自己の本能を満足させようとする男が多かったでしょう。そんな中で僅かに彼女の心を慰める存在が傘屋の吉三でした。

吉三は芝の新網に住み角兵衛を仕事としていましたが、仕事に歩けなくなり仲間に置き去りにされていたのを傘屋の先代に拾われたのが六年前です。一六歳の今では油ひきに大人三人前の腕前になっていますが、「肩幅せばく顔少さく」、背も低いので一寸法師と仇名で呼ばれ、仲間からもいじめられていますし、見も知らぬ父母のことを思い、人知れず涙を流すことも少くありません。その胸苦しさから町内に恐れられる乱暴をして心を慰めています。優しくしてくれる人には「しがみ附いて取ついで離れがたなき思ひ」を持っています。お京もその一人です。彼は暇が出来る夜でも彼女の家へ来て、寝間着のまま格子戸を明けてくれるお京の傍で餅を焼いて喰べています。彼女の妾奉公の噂を聞いた時にはそんな事はない事もないと言つて仲間と争い、お京には「女口一つ針仕事で通せない様な事を始めたのか、余り情ないでは無いか」、「お廃しよ、お廃しよ、断つてお仕舞な」と言っています。が、彼女の心が変らないのを知ると、「お前さんを姉さん同様に思つて居たが口惜しい、最うお京さんお前には逢はないよ」、「人をつけ、最う誰れの事も当てにする物か、左様なら」と別れを告げています。出来るだけ汚れに染まらず潔癖に、現在を誠実に生きようとしている吉三の生活の何処を見

ても明るい調和の見出せない世界であることが描かれていることにはなりますが、彼もお京により積極的に生きる方法を示すことは出来ません。お京を肉親の姉の如く思つて慕っていますから、他の男たちのように愛慾の本能をむき出しにして彼女に接しているとは異つていますが、彼のお京に対する甘えはそれと無縁のものではありません。お京の縫っている質屋の隠居の年始着を「彼の兀頭には惜しい物だ、御初穂を我れが着て遣らうか」と言い、誰も連れずに独りでお京の許へ出掛けて行く吉三にはお京を独占しようとする気持があります。自分の心の拠り処を失うまいとしてお京の転職を阻もうとしているだけの処には彼の我執を見ることも出来ましょう。このように見て来ますと吉三も自己の本能と我執の故に一人の女性を梗塞しようとしている男の一人と言えそうです。

上に見て来たので明かなように、「十三夜」の原田や録之助にしても自己の我執や愛慾の本能を満足させる為に阿関やその妻となつた女性の上に我意を振り、彼女らを不幸な境遇に陥らせて平気でいますし、阿関の父親や録之助の母親も家中心の考え方から娘や嫁を不調和な世界に追い込んでしまっています。結局「たけくらべ」以後の作品に於いて、自己にふさわしい在るべき場所を希求しながら、それがどういふもので何処にあるのかわからないで苛ら立ち悶える女性の相は描きながら、彼女らを従来からあつた酌婦とか仕立屋とかいふ仕事の中に置くことしか出来なかつた一葉は、そうした世界では結局その目的を達成し得ないことを書くと共に、彼女らの在るべき生き方を教示し得る男を種々なる階層の中にも見出すことが出来ず、却つていづれも女性の生を梗塞し、或は世俗的な観点からし

か彼女らを見ることの出来ないものであることを見て、お京のように自暴自棄的になつてしまふ女性を書くか、美しい情趣的な世界の中に問題を流してしまふかしてしまつたのです。が、一葉自身は二七年以後は腰を据えて作家としての道を歩んでいます。何故にそのような自己を下敷にして、自己の個性を生きる為に努力する女性を描くことが出来なかつたのでしょうか。

「水の上日記」明治二七年七月二〇日の条に、「隣家に此ほとよりかゝり居る女子」——神戸の然るべき刀剣商の娘ですが、「十六の歳より身の行よからて」職工と契つた為に父の怒に触れますが、男との間は円満で子供も生まれます。しかし男の親の心悪しき為に男と別れ、大阪中の島の洗心館で中居をしていましたが、其処で知り合つた、名高い貿易商の一家の広瀬某と愛し合うようになり、その為に彼が支店に左遷された時も一緒に東に來ます。その時に迎への人々の手前、彼女をさる大家の令嬢と言いつくろつた男は、学問修業の爲東京へ出るのを托されて同道したとして乳母の許に預けますが、その前身が現れて其処にいらなくなり銘酒屋うらしまやの酌婦となつていましたが、救いを求めて來たので一肌ぬいだことが書かれています。この女性が「にぎりえ」のお力のモデルと言われていますが、ここに一葉の俠氣と共に、彼女が世間体とか身分の高下のみを考えている人々と同列にしているのではないことも示されています。お力やお京に共感を込めて書いた所以でしょう。一葉自身の意のままにならぬ生活故の梗塞感なり苛ら立ちなりは重ね合されていますので、一応実感に支えられた作品にはなつてもいるのです。が、彼女の作家としての努力は擬古典主義的な表現に向けられてし

まっています。作品やそれを書く作家の意識がまだ近代化し切つていなかった時期であつた為にそれも仕方ないことだつたとも云えますが、一葉自身の問題でもあつたことは云う迄ありません。「塵之中日記」(明治27年3月)に「虚無のうきよ」に在つて「事をなさんとくはたつるものかならず人道に寄」ることが必要であり、「天地ことくのみ尽して有無両端をたなそこにきりたりとも行はざる誠は人みるによしな」きものであるが故に、「いにしへのかしこき人」が「こゝろの誠をもととして人の世に処するの務をはけ」んだように自らも生きるべきであり、そうした時始めてその人の「一語人に益あ」ることになるのだと書いた人は、更に

我身きよしといへとも感は人のこゝろにありて耳にあらねはかひなきは放言高論のたくひなり世に文章家といふものありて華文麗辞をつらぬるによく和歌俳句たくみに詠するもあり又弁士とて悲歌慷慨の語をなして一時の語をなして一時の感を起すもあめりさる物からこれ等はくゝつの木偶をまはして人めをよろこはしむるたくひにも似て唯一のよろこひはかりならんのみ一時におこりたる感は一時にして消ぬへし一代をつゝみ百世に残りぬへきわさをとおもふに事は我身にありて人にあらず我み清しとて人をおとすはまたよし人を論するを知りて我身の誠をあらはすをしらす(中略)いかに又みにくからずや

とも書いています。美辞麗句を連ね、悲憤慷慨の調子で、読む人聞く人の感情をくすぐつたり、単に他人の欠点を暴露するだけの批判の爲の批判をしても、それは一時的な快感を人々に与えるだけのものに過ぎず、作家たるものは読者を心から感動させ、しかもそれに

よって「こんくたる流れは濁を清にかへして人世是非の標準さたま」る如きものであることが必要なのだから、作家は「天地の誠」を自己の内面に感得しそれを具体化して生きる自己の生からにじみ出したものを作品化したものでなければならぬと述べているのです。言い方は決して新しくはありませんが、「我一身の欲をすてたのしみを捨てしかして後にわかおもふまゝの世を得んとす」とも書いています。

このように作家の在るべき相について書いた一葉は、更に「塵中につき」(明治27年3〜5月)の冒頭に

道德すたれて人情かみの如くうすく朝野の人士私利をこれ事として(中略)世はいかさまにならんとすらん かひなき女子の何事を思ひ立たりとも及ふまじきをしれとわれは一日の安きをむさほりて百世の憂を念とせざるものならず かすか成といへとも人の一心を備へたるものか我身一代の諸欲を残りなくこれになけ入れて死生いとはす天地の法にしたかひて働かんとする時大丈夫も愚人も男も女も何のけちめか有るへき 笑ふものは笑へそしるものはもしれ わか心はすてに天地とひとつに成ぬ わかこゝろさしは国家の大体にあり わかかはねは野外にすてられてやせ犬の多しきに成らんを期す

と書いて、「わか心はすてに天地とひとつに成」ったのだから、仮令どのような結果になろうとも「天地の法にしたか」って働こうと決心し、「これよりいよく小説の事ひろく成してんこのこゝろ構へ」(「塵中につき」4月26日)をかためたことを記しています。五月一日には龍泉寺町から本郷丸山福山町に転居し、月手当二円で萩の舎

の助教になりますが、丸山福山町の借家の家賃が三円ですから、生活の為にも本腰を入れて創作活動をするようになります。更に七月一日に上野桜木町の丸茂病院に入院中の樋口幸作が亡くなった時に「浅ましき終をちかき人にみる 我身の宿世もそゝろにかなし」(「水の上日記」と書いていますが、和田芳恵はこれが作家一葉の成立に大きな影響を持ったとしています。

こうして作家一葉は誕生し、「暗夜」以下の作品が書かれることになるのですが、

天地の誠は虚無のほかにあるへからすといへとも人世の誠は道徳仁義のほかにあらず これをたつとんでかれをすつるは愚也 かれを取りてこれに背もいまだし 虚は空にして実は何も 無はうらにして有は表也(中略)されは人世に事を行はんものは かぎりなき空をつゝんで限りある実をつとめざるへからす一時の勇はいまた勇といふべからす(「塵之中日記」)

とあるのも明かなように、彼女にあつては「天地の誠」を生きることは「人世の誠」である「道徳仁義」を死を覚悟してでも生きることであり、それが「人の世に処すの務」であり、「つとめは行なひ也行は徳也徳つもりてはしめて人の感おこる」と言うのですから、「道徳仁義」を誠実に生きることによって他を感動させることが出来るということになります。しかも一葉は

虚無のうきよに君もなし 臣もなし 君といふそもく偽也 臣といふも又偽也 いつはりといへともこれありてはしめて人道さたまる 無中有を生じてこゝに一道の明らかなるものあれば人中に事をなさんとくはたつるものかならず人道に寄らざる

へからす（「塵之中日記」）
とも

こゝろは天地の誠を抱きて身は一代の狂人になりても終らば人に益なくうきよに功なく清濁いつれをまされりとせんや（全右）とも書いています。仮令虚偽であつても既に現実に存在するものはこれを認め、抛り処にすることになつてゐるものは抛り処にすることこそ正しいのだとしています。従つて道徳仁義も現に世間に行われてゐるそれであることは明かでしょう。そういう一葉は天地の誠を心に抱きながら「一代の狂人」になる人間の持つ意味については全く考えようとはしません。これではお力やお京の狂気や苛ら立ちの意味について考察し、そこに在る問題の本質を把握し、人間の個性を尊重しそれを生きたる世の中を形成する為にはどうしたらよいのかを探る努力を誠実にする処に、天地の誠なり人世の誠なりを觀、新たな道義の在るべき相を示すなどということの出来よう筈はありません。一葉自らは「水のうへ」に於いて

「こその秋かり初に物しつるにこり江のうわさ世にかしましうもてはやされてかつは汗あゆるまで評論などのかしましき事よ十三夜もめつらしけにいひさわきて女流中ならふ物なしなどあやしき月旦の聞えわたれるこゝろくるしくも有かな（中略）かく人々のいひさわく何かはまことのほめこと葉なるへき たゞ女義太夫に三味の音色はえも聞わけて心をくるはするやうのはかなき人々か一時のすさひに取はやす成るらし」

「国民のとも春季附ろく書つるは江見水蔭ほし野天知後藤宙外泉鏡花および我れの五人なりき 早くより人々の目そゞき耳引

たてゞこれこそ此年はしめの花と待わたりけるなれば世に出るよりやかて沸出ることき評論のかしましきよ（中略）あやしうこれれも我かかちに帰して読書社会の評判わるゝか如しとさへ沙汰せられぬ 評家の泰斗と人ゆるすなる内田不知庵の口を極めてほめつる事よ（下略）

にこり江よりつゞきて十三夜わかれ道さしたる事なきをかく取沙汰しぬれば我れはたゞ浅ましようて物たにいひかたかり」と書いて、自己の作品の評判高きことにそれ程の作品ではないのにと不満を述べていますし、「たけくらべ」の評が「めざまし草」に掲載された直後の「みつの上日記」には

我れを訪ふ人十人に九人まではたゞ女子なりといふを喜ひてもの珍らしさに集ふ成けり されはこそことなる事なき反古紙作り出ても今清少よむらさきよとはやし立る誠は心なしのいかなる底意ありてともしらす我れをたゞ女子と計見るよりのすさひされは其評のとり所なきこと疵あれとも見えす よき所ありてもいひ願はずことなきたゞ一葉はうまし、上手なり（中略）といふ計 その外にはいふ詞なきかいふへき疵を見出さぬかいとあやしき事とも也

と、批評に対する不満を具体的に書いています。「我れをたゞ女子と計見るよりのすさひ」という処には周囲の男たちの女性に対する特殊視が指摘されているわけですが、一葉のこうした感じが結城朝之助や源七とお京周辺の男たちを上に見て来たように書かせることになつたのでしょう。一葉の男たちに対する皮肉な眼を、其処に見ることが出来ます。しかし一方に於ては一葉自身、

わか身は無学無識にして家に産なく類縁の世にきこゆるもなしはかなき女子の一身さゝけて思ふ事を世になさんとするともしろに限りあり 智恵の極みしるへきのみ（「水の上につ記」明28・5・10）

はかなき草紙にすみつけて世に出せは当代の透逸なと有ふれたる言の葉をならへて明日はそしらん口の端にうや／＼しきほめ詞などあな侘しからずや かゝる界に身を置いてあけくれに見る人の一人も友といへるもなく我れをしるもの空しきをおもへはあやしう一人この世に生れし心地そする 我れは女なり いかにおもへることありともそは世に行ふへき事かあらぬか（「みつの上」明29・2）

など書いています。「みつの上」では自分を知る者の一人もないことを嘆いてもいますが、結局自分の思うことを書いて行こうとしても、無学無識で、しかも女の身であることを考えた時、到底出来ないことだと独り極めに極めてしまっています。これだけでは彼女の「おもへること」がどういふことなのかわかりませんが、こうした考え方の一葉であったが故に、自己にふさわしい生を生きることの出来る場所を求めるお方やお京を描きながら、酌婦や仕立て業の境遇を脱して新しい生獲得の為に闘う彼女たちの相を具体的発展的に描くことが出来なかつたのです。自からの生活を見詰めることまでは日記に於いてなし得ても、そこに在る苦悩の奥にある問題について考察する自己を考え、その考察、解明に努力する自己の相なりその過程なりを彼女らに反映させて描き得る程に観念化することも、そうしたものを描くのも小説であるとする気持も、試行錯誤を重ね

ながらもそれを実行する勇氣も持ち得なかつたのでしょう。外側から批評家たちに指摘されることは望みながらも。その為にこれから後の作品に於いても「誠は道徳仁義のほかあらず」とし、「いつはりといへともこれありてはしめて人道さたまる」という処から変化することが出来ないで、従来から考えられていた君臣親子夫婦の関係なりそれを基にした道徳なりを人生の根本とする立場を、そのまま提示することが主になってしまっているようです。

「子は夫婦の鏡」ということを作品化した「この子」(明29・1)日本(家庭)は発表誌の関係もあつたと思われませんが、「裏紫」(明29・2「新文壇」)では小松原東二郎と結婚する前からの馴染であつた吉岡某からの呼び出しの手紙を受け取つたお律が、良人には姉が何か心配事があるらしく、来て呉れられまいかと言って来たとして許しを請い、家を出た後に、気持よく家を出してくれた良人らしい、「毒の無い、物疑ひといふては露ほどもお持ちなさらぬ心のうつくしい人を」舌三寸に欺いて、「心のまゝの不義放埒」を行う自己を省みては、呼び出しに應ずる自分を責め、一度は思い切つて家に帰ろうとして足を返しますが、寒い夜風にはつとしてその考えを破り、「形は行つても心は決して遣るまいと極めて置いたを、今更に成つて何の義理はり。悪人でも、いたづらでも構ひは無い。お氣に入らずばお捨てなされ。捨られれば結句本望。彼のやうな愚物様を良人に奉つて吉岡さんを袖にするやうな考へを、何故しばらくでも持つたのであらう。私の命が有る限り、逢ひ通しましよ切れますまい」と考え直して急ぎ足に駆け出しています。吉岡某と恋し合つていたお律が財産家の小松原に求婚され、それを断ることが出来

ないで嫁入りしたのですが、その後も吉岡と逢瀬を重ねることを書いて、周囲の動きに反対して自己の恋を生き得なかった女性の、それ故に形は小松原と結婚しても何とかして自己の恋を生き抜こうとしている相を描こうとした作品でしょう。その点では「十三夜」より一步前進したものと考えることも出来そうです。が、人のよい良人を欺くことの罪深さを考えるお律を描いた一葉は、急ぎ足に駆け出したお律の「胸の動悸のいつしか絶えて、心静かに気の冴えて色なき唇には冷やかなる笑みさへ浮びぬ」と書いて「上」を終らせています。自己の計画通りに良人を欺いているお律に毒婦めいた印象を与えるような書き方でさえあります。一葉の文章の旧さが示されてもいるわけですが、結局お律のような考え方、生き方をする女性に十分の同情、共感を示すことの出来なかつた一葉であったことになりまふ。その為でしょう。この後の草稿には吉岡に縁切りをしてくれと懇願するお律を描いたり、「貴君のお子にさへお替りがなくはほんに／＼嬉しうムります」というお律が描かれたりしています。が、この作は「上」だけで中絶されています。「新文壇」の廃刊ということもあつたとは思いますが、編集者の催促は四月五日附の高瀬文淵の書簡までありますので、吉岡を何処迄も心の良人と思つて生きようとするお律に共感を込めて描き切ることの出来なかつた一葉であつたことを示しています。このような一葉が「裏紫」の場面を或る程度生かしながら全く傾向の異つた作品として書いたのが「われから」(明29・5「文芸倶楽部」)でしょう。

女主人公町子は金村恭助の妻です。高利貸与四郎の一人娘として成長しましたが、彼女が母の美尾によく似ていることから、良人を

捨てて他の男の許へ走つた美尾を憎む与四郎は町子を寄せつけず、朝夕淋しく暮して来たので、恭助を唯一の頼りとして暮しています。が、恭助は遊び好きで芸者などとの接触も多く、一〇数年来馴れ親しんで、二人の中には一歳の子さえあるお波を囲つてもいます。彼はそういう女性がありながら町子と結婚し一〇年余り経っています。処で、彼女の一日は朝飯前の入浴から始まります。「其身に成りては誠に詮なき癖をつけ」たと思ふこともありまふが、習慣故に「これの済までは箸も取られず、一日怠る事のあれば終日氣持の唯ならず、物足らぬやうな氣に成」ります。「さなご入れたる糖袋にみがき上て出れば更に濃い化粧の白ぎく、是れも今更やめられぬやうな肌」になっていますが、「いまだに娘の心が失せで」、「旦那さま進めて十軒店へ人形を買ひに行くなど、一家の妻のやうには無く」、良人と共に川崎大師に参詣した時に道すがらの人々に「あれは新橋か、何処ので有らうと囁かれて、奥様とも言はれぬる身ながら是れを浅からず嬉しうて、いつしか好みも其様に」なっています。

このような町子が良人の誕生日の宴での隠し芸——芸妓小梅の三味に合せて勸進帳の一くさりを語るのを見て、「いつの間彼のやうな意気な洒落ものに成り給ひし、油断のならぬ」と思うと共に、「彼れほどの御修業つみしも知らで、何時も昔しの貴郎とおもひ、浅き心の底はかと無く知られ」、「有限だけの家の内に朝夕物おもひの苦も知らで、唯ぼんやりと過します身の、遂ひには倦かれますやうに成りて、悲しかるべき」結果になるのではないかと思ふやうになります。その後恭助とお波のことを知つた町子は、彼女の塞いでいるのを見た恭助が機嫌を取るのに対して、「鬱々時は鬱がせて

置いて下され、笑ふ時は笑ひますから、心任せにして置いて下され」と捨てばち気味な態度を示した後に、書生の千葉に接近して行くことになります。これより以前、良人の帰宅しない夜、町子は寝つかれぬままに起き出して妻恋い歩く愛猫を家の中に呼び入れようと庭を見た時、まだ明りのついている書生部屋に菓子を持って行き、消えかけていた火鉢の火をおこし、まだ起きているという千葉の背に羽織を着せて戻っています。その後仲働の福から千葉がかつて村長の妹を恋したこと、水呑百姓の息子の千葉では身分が違う上に無口な彼は心の中だけで思っていたのですがその娘が病気で亡くなってしまったこと、町子はその娘によく似ていること、町子の病がちなことを聞いて心配していることなどを聞かされます。こうしただけがあつた為でしょう。お波のことを知って種々物思うようになった町子が時々癪を起すようになりますと、始めはその度毎に医者と呼ばれていましたが、日毎夜毎に度重なるようになってからは千葉が呼ばれて介抱するようになります。「無骨一遍律義男の身を忘れての介抱人の目にあやしく」、やがて「隠れの方の六畳をば人奥様の癪部屋と名付けて、乱行あさましきやうに取な」し、加えて福がかねてから目を付けていた町子の着物を千葉の新年着に仕立ててやったので、「恨み骨髓に徹りてそれよりの見る目横にか逆にか、女髪結の留を捉らへて珍事唯今出来の顔つきに、例の口車くる／＼や」ったこともあって、「一町毎に風説は太りけん、いつしか恭助ぬしが耳に入」り、やがて町子は別居を言い渡されることになるのですが、千葉との関係については

あとなき風も騒ぐ世に忍ぶが原の虫の声、露ほどの事あらはれ

て、奥様いとど憂き身に成りぬ。

とあるだけです。この点に関しては「みつの上日記」五月二十九日の条に、訪ねて来た斎藤緑雨から「めさまし草三人冗語」の一人幸田露伴が上の引用部分から「正しく実事ありたる也」と言ったというのを聞いて、一葉自ら「誠にしのぶの原の虫の音に心つき給ひしこそ我が心にてはあれ」と答えていますので、町子と千葉との間に実事があつたことを想定して書いた一葉であつたとも考えられます。それは兎に角、町子の千葉への接近は彼女の良人のつんだ修業の跡を自らも歩もうとした第一歩とも、目覚めた女性の第一歩とも考えることが出来ましょう。が、作者はそうした意味を見ようとはしていません。

町子の母の美尾は月俸八円で大蔵省に勤めていた与四郎に嫁ぎます。彼等は幼馴染で与四郎が彼女を恋していたからです。与四郎は妻を大切にし、出来る限り荒い仕事はさせないようにしていました。結婚後四年目の春の花見の時に美麗を尽して着飾っている女達を見た美尾は、それ迄に「これほどの容貌を埋れ木とは可憎しいもの、出て居る人で有うなら恐らく島原切つての美人、比べ物はあるまい」が、「惜しい女に服粧が悪るい」などと言われていたこともあって、彼女等より美貌の自己の服装を思い、与四郎との生活に不満を感じるようになります。出世の為の努力もしない良人にその不満がぶつけられ、夜学なりとも行って勉強してくれと言っても聞いてくれぬ与四郎と争いを繰返すようになります。次の年の春、与四郎が梅見に出掛けた留守に家をあげ放しのまま外出し、一夜外泊して以来、実家への足が頻繁になり、その年の一〇月一五日に町子が生れ

ましたが、翌年彼女の母が生涯面倒を見て貰うことを条件に、高位の軍人一家の女中頭として主人と共に京都へ行くと言つて与四郎から離れて後間もなく、彼女も町子の乳代として若干の金と「美尾は死になる物に御座候、行衛をお求め下さるまじく」という置き手紙とを残して、与四郎の許から姿を隠してしまいます。

美尾の母親は与四郎に対して常に「今の内から心がけ最う少しお金になる職業に取かへ」ろ、私にした処で「贅沢を言ふのでは無けれど、お寺参りの小遣ひ位出しても貰はう、上げませうの約束でよこしたもの」、それなのに私は自分で働かなければならぬ現実、「当て無しの苦労は出来ぬもの」、お前も今の内に覚悟をきめ、美尾と子供とを自分に預け、独り身になって一廉の働きをしたらよからうと言つていたのですが、美尾の家出の前に上に触れたような西京行を口にしているので、美尾の背後に母親があつて万事に采配を振つていたことは明かでしょうし、美しい着物に憧憬れた美尾が母親の言葉に従つたことも明かでしょう。

このような美尾やその母を描いた一葉は町子がこの美尾の子であることを重視しています。確かに町子は美尾がそうであつたと同様に妻らしくない女です。彼女の化粧や服装の好みや習慣は人妻というより芸妓のそれです。が、これらも恭助が敢えてさせていたと考へることも出来ます。彼は可成りの派手好みで遊び好きです。町子が屢々心を労しているのでもわかるように各所の芸妓に馴染があり、特別の関係を結んだのも少くはないようです。そういう恭助が町子に派手な装いをさせて寄席や芝居などに連れ歩いているのです。彼女との結婚にしても「心安く志す道に走つて、内を顧みる疚しき

の無」いことを求めた為ですから、始めから与四郎の財産が目当てだったことになりす。等外の八円の月給取りから蕎麦掻き売りに転身し、金をためて高利貸となり数万の財産家となつた与四郎にとつては娘の婿として可成り勢力のある役人、政治家である恭助は願つてもない人だったでしょう。だから恭助の人柄や結婚の目的などは全然考へなかつたことと思われす。互に自己の周りを飾る装飾品の一つと考へていたことでしょう。だから町子が「強ち良人を侮るとなけれども」自分の感情の赴くままに振舞い、良人の行為を責めることにもなつたのでしょうし、そんな妻であつても恭助は文句も言わずに機嫌をとつていたのでしょう。町子に子供が出来なかつたのも、彼女が妻としての存在でないことを一葉が示していたのでしょう。子を捨てた美尾の罪が町子に現れたとする一葉だつたとも考へられます。恭助の妻としての好みはお波に示されています。「色の浅黒い面長で、品が好く、髪は毛自慢の櫛巻で、薄化粧のあつさり」として、恭助が来ると子供を先立てて玄関へ駆け出して来、「貴郎」と呼びかけ、彼が腰掛けると「駆け下りて靴をぬがせる」というように、何処迄も男を立てて彼に尽し、自らは遜つておとなしく、派手にせず自己の自然を生かして品好く、気の利く女——すべての点が町子とは反対の女性です。恭助とお波との関係は一〇何年続いており、男の子も一歳位ですから、彼が金村の養子になる以前からのものですので、恭助は始めから与四郎の財産が目当てであり、町子は彼の遊び相手の一人でしかなく考へられる所以でもあります。

このように見て来ますと、この作品は一応時代なり当時の社会な

りの根底にあった政治家と金の問題の一端を捉えてもいるのですが、一葉は恭助という男の金を愛し、愛慾の本能を満足させる為に女性を意のままに動かそうとしている面だけを強調する書き方をとってしまつたのです。それでもなお女性を愛慾の対象と考えるだけで、彼女らの心については何も考えようとはしない男を描き、町子がそういう男に反撥し、純情な千葉に心を傾けて行つたということになる現象を捉えたと考えられることも出来るのですが、一葉はそうした観点からもこの作を描こうとはしなかつたのです。恭助に現れてゐる問題を追求しようとはしないで、専ら町子の側からのみ考え、彼女が千葉と交渉を持つようになったことも母からの遺伝として捉え、美尾の場合と町子の場合との相違について考えることなく、形の上の類似だけを見てしまつた為に、「塵之中日記」に

いにしへのかしこき人はこゝろの誠をもととして人の世に処するの務をはげみたりき つとめは行なひ也行は道也 徳つもりてはしめて人の感おこる 此感一代をつゝみ百世に渡り風雨霜雪やふるによしなく一言一世に功あり 一語人に益あり こん／＼たる流れは濁を清にかへして人世是非の標準さたまらんとす 我一身の欲をすてたのしみを捨しかして後にわかおもふまゝの世を得んとす

と書いた人は、町子の行為を「人世の誠」である「道徳仁義」をもととして人の世に処する務を放棄したものとして、否定的に捉えることしか出来なかつたのです。

十六日の朝ぼらけ昨日の掃除のあと清き、納戸めきたる六畳の間に、置炬燵して且那さま奥さま差向ひ、今朝の新聞おし開き

つゝ、政界の事、文界の事、語るに答へもつきなからず、他処目うら山しう見えて、面白げ成し

と書いた一葉は、話の内容は書いていませんのではつきりはしませんが、一応町子を政界、文界の事について恭助と話し合うことの出来る女性としてゐるので、そうした方面に於いて良人を十分に理解すると共に新しい女性の在り方を追求して自己の世界の確立の為に努力する町子を描くことも可能だとは思つたのですが、前にも引用したように「我れは女なりいかにおもへることありともそは世に行ふべき事かあらぬか」(「みつの上」)と自ら書き、彼女を訪れる文壇人は「十人に九人まではたゞ女子なりといふを喜びてもの珍らしさに集ふ」と書くだけの人であつてみれば、そうした男たちに不満は感じながらもそうした男たちを批判し、男たちと政界、文界の事など論ずるは女にあるまじきことと考えてもいたのでしょう。その為に町子の場合も良人の遊びの世界での在り方の追求に限定してしまつたとも考えられます。森鷗外は弟の三木竹二を使者として「めざまし草」の三人冗語に加わること求め、「四つ手あみといふ名を付し」て「各々名を署して評論さかんにせはや」と考へていることを伝え、更に合評会の日取りの相談までしてはいますが、一葉は「こゝかしこより入会出席などの事いひ来るにこゝへ計出る事いかならん」と考へ、「たゞ臆病ものなれば御はれかましき席の恥かしうて」とだけ書いて断つてしまいます(「みつの上日記」五月一日、六月十一日の項参照)。「毒筆のみならず誠に毒心を包蔵せる」者と思われる緑雨の動きなどに不安を感じたこともあつたようですが、やはり「我れは女なり」という気持が強く一葉を支配して

いたのでしょうか。

折角女性や子供を梗塞し、支配する周囲の力の種々相を捉えて書き続けて来た一葉でしたが、町子が養子恭助に自己の家を追われることになった原因をすべて町子の側にあるかのように考えて「われから」と題してしまった処に、その努力の殆どすべてが無に帰してしまったと言えましょう。最後まで「良人」という字を使っていた処にも一葉の世界に「良人」批判などなかったことを示しているのかもしれませんが。それだけ一葉自身の内部に旧さが残っていたことになりませんが、同時に一葉を取りかこむ人々の考え方の旧さなり、我執なり、社会の暗さなりが重苦しく彼女の上のしかかっていたことを示すことにもなるのですし、そうした現実の中の苦悩が彼女の死を早める結果になったとも思われるのですが。

このような「われから」が一葉の小説らしい小説の最後になってしまいました。一面に於ては逍遙、二葉亭に始まった写実主義的手法と、「文学界」の人々との接触によって得た浪漫主義的な自我解放への希求と、二〇年代の古典主義的傾向とを緬い合せた作品を書いて、明治二〇年代を代表する作家と言える一葉でしたが、相馬御風にその「樋口一葉論」(明43・1「早稲田文学」)の中で、

「併しながら今日から観れば、一葉は矢張り自覚なき女であった。開放されざる女であった。胸の底には痛切なる要求は燃えながらも、頭に於ては結局旧い日本の女であった。凡てを突き出して冷やかに観照する事の出来るまでには至つて居らなかつた。全然新しい眼を以て、人生を観照し批評するまでには至つて居らなかつた。たゞ然しながら彼は旧い日本の女として、

行き得る限りまで行き、思ひ得る限りまで思ひ詰め、訴へ得る限りまで訴へ尽した女である。」

と書かれなければならぬ作家だったことになりました。

(昭57・8・30)